

文化施設が必要とする機能

美術館から受け継がれるもの を中心に

Writer

村上 綾 MURAKAMI Aya

博士前期課程芸術専攻
芸術支援領域 1年

1990年前後から設立され始める文化施設の中には、美術館のように展示機能をもつ教育普及事業を設けているものがある。しかし、収集の活動を重視せず常設展示を行わない施設もある。美術館からの変遷を顧みると、美術館の活動の中核である作品の収集保存が削ぎ落される一方、後から盛んになった教育普及活動が選り取られているとみることができる。

現在の美術館のすがたになるまで

現在、美術館に見られる主な機能として、収集保存・研究・公開・教育普及がある。現在は日本全国の美術館において全ての機能が充実した姿が見られるが、それぞれが機能し始める時期にはばらつきがあり、実現には長い時間がかかった。

日本で美術館が成立する以前、明治4年から博覧会や博物館などにおいて美術品の公開は始まった。明治期から恒常的な展示を可能にする美術館の設立は求められ続けていたが、収集保存・研究・公開の機能をもつ公立美術館の実現は、昭和8年(1933年)の大礼記念京都市美術館(現:京都市美術館)の開館を待たなければならない。第二次世界大戦後、昭和24年(1949年)には社会教育法が、昭和26年(1951年)には博物館法が制定し、各地で美術館が設立され、収集保存・研究・公開の活動が充実し始める。しかし、教育普及活動が盛んになり始めたのは、そこからさらに時間を経た1980年代あたりである。そこからは美術館の活動の軸は4つとなり、現在と同じ姿になるといえる。

また、1980年代は各地で文化振興条例が制定し、文化振興財団が多く設立されるなど、美術館だけではなくホールの建設ラッシュにあたる時期でもある。そのような流れのなかで、博物館法では博物館とは見なされないが美術館の機能をもった文化施設も見受けられるようになる。

受け継がれ、選り取られる機能

このような文化施設のなかには、美術館を踏襲するように展示機能をもつ、教育普及事業も設けているところがある。しかし、コレクションを積極的に扱わない、または全く行わず、常設展が開催されていない文化施設が存在する。

例えば、2003年に開館した山口情報芸術センター[YCAM]は企画展と教育普及活動を行うが、コレクションは持たず常設展も開催していない。パフォーマンス、コンサート、映画の鑑賞にも対応できる複数の設備が整えられ、図書館も併設されている。常駐のテクニカルスタッフと共同で開発・制作が行われ、生み出されたオリジナル作品は国内外の展覧会へ招聘されるなど、作品の発信の拠点としても機能している。分野をまたいで展開される教育普及事業も注目されている。参加者が能動的に経験するプログラムを多く実施しており、なかには参加者がイベントの企画運営を担うこともある。また、作品と同様に国内外からオリジナルワークショップの開催依頼を受けるなど、芸術鑑賞の場を提供するだけでなく、発信拠点として機能しているといえる。このように、美術館と比べ

多機能であるというところから、新たな文化施設の可能性を見込んで事業を展開していると考えられる。厳しい時代のなかで選り取ったのは、美術館におけるコレクションや常設展という活動ではなく教育普及事業であるというところに着目すべきなのではないだろうか。

以上のことから、文化施設が芸術鑑賞の場を提供するため、文化拠点として施設が継続するために必要なことが、文化施設のエッセンスに秘められているのではないかと推察できる。本論の意義は、そのような文化施設のエッセンスの特色を分析することで、それらの発展に寄与することにある。

自由ヴァルドルフ学校 における造形教育の特質

下級学年のエポック授業に着目して

Writer

吉田 奈穂子 YOSHIDA Nahoko

博士前期課程芸術専攻
芸術支援領域 1年

世界に目を向けてみると独特な教育を行っている学校が数多く存在しているが、私はその中でも特に造形教育に力を入れた教育を行っているドイツの自由ヴァルドルフ学校(Freie Waldorfschule)に着目し研究を進めている。ちなみに日本では、1970年代に子安美知子の『ミュンヘンの小学生一娘が学んだシュタイナー学校』(中公新書)が出版され大ヒットとなり、多くの日本人に「シュタイナー学校」という名でこの学校が知られるようになった経緯がある。

自由ヴァルドルフ学校とは

自由ヴァルドルフ学校は、ルドルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner, 1861~1925)という人物によって創設された学校である。1919年に第一校がシュトゥットガルトに創設されてから、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、アジアと世界中に学校を増やしており、日本を含め現在世界中に1023校存在し、今もなお学校数を増やしている。

シュタイナー幼稚園もあるが、自由ヴァルドルフ学校は基本的には、7歳以上の子どもが通う12年間一貫教育の学校である。ドイツの一般的な公立学校に通う子どもは、4年生(10歳~)で大学進学を目指すギムナジウム(Gymnasium)、事務や専門職に就くための実科学校(Realschule)、職人を育成する基幹学校(Hauptschule)、これらの3つを総合した総合学校(Gesamtschule)など、どの学校に進み、どの職業に就くのか、自分の進路を早期に決める。よって、この学校の12年間一貫教育はドイツ国内では、珍しい教育システムであると言える。また、この学校は世界に先駆けて男

女共学、初等教育からの外国語教育、以前は「女性の仕事」とされていた裁縫や手芸を男性にも同じように行わせるカリキュラムなどを取り入れ、今では「当たり前」の教育を創設当時から行っていた。その一方で、教科書も、できばえを測るテストも、それを数値化した成績表もないなど、日本の一般的な教育を受けてきた私たちからは想像もできないような教育的な特徴もある。

「生きた知識」を与える自由ヴァルドルフ学校の造形教育

授業では、シュタイナーの教育思想ののっぴり、頭で覚えるだけの「死んだ知識」の詰め込み教育ではなく、感情や意志に働きかけることにより「生きた知識」を子どもに与えることが意識されている。具体的には、人間の感情や意志に影響を与えやすい、何かをつくりたり描いたりする造形的な活動や表現活動を通して教科を教えるという形が取られ、最終的に芸術を用いた調和的な人間形成を目指している。それゆえ、図画工作や美術のような造形活動を専門的に行う授業だけでなく、読み、書き、計算などの国語、算数(数学)、理科、社会などの教科も、造形的な活動を通して「エポック」という授業の中で教えられている。この「エポック授業」は毎日午前中2時間続きで担任教師が1つの教科を何週間もかけて集中的に教える。この学校の教育はシュタイナーの思想を踏まえて実践されているが、8年間はクラス替えも担任の教師も変わらないため、「エポック授業」は特に担任教師の授業力が鍵となる授業でもある。

この学校の子どもたちは高学年で造形の専門的な授業を受ける前に、この「エポック授業」で基礎的な造形的な力を身につけている。「エポック授業」でどのように担任教師が教科の学習とともに造形的な活動を行っているのか、授業方法、授業内容、教材開発などを、実際にこの学校の教員養成課程に入学し、ゼミナールでの講義や授業観察から学び分析する。そして最終的に、時代と共に変化している「現在」の自由ヴァルドルフ学校の造形教育の特質を解明することが研究の目的である。このことは、教科別に教育を行う日本の教育においてこれからの造形教育のあり方を提案し、造形教育を学校教育で行う意義や価値について考えるきっかけになり、私自身が将来教師になった時の手助けにもなりうると考え、研究を進めている。



自由ヴァルドルフ学校の4年生のエポック授業の様子。1mに切りそろえた棒を使った長さの学習。(2009年)